

## 皮革の社会史 第2回

アジアの革づくりの人々  
—客家とムスリムたちの「金の扉」

西村 祐子

## はじめに

インドネシアのジョグジャカルタ市は人口三二〇万人でジャワ島東部に位置する古都である。ポロブドゥール遺跡があるジョグジャカルタ特別州の州都だが、インドネシアでも有数の皮革の産地でもある。インドネシア皮なめし協会は本部をここにおいていると聞いて、このまちを訪れてみた。会長のH氏は工場をこの地で操業しているなめし業者で

ある。同業者も周辺に多いので、ジャカルタより皆が集まるには便利だという。H氏は人望があり、周囲からぜひとも会長になってほしいと懇願された。閉鎖的だった皮なめし業界を外にむけてオープンにしたいと考えていて、就任してからすぐにインターネットなどの発信をはじめた。私の研究にとても関心を示してくれ、ほかの国々でなめし業者たちの歴史がどうなっているか尋ねられた。

インドネシア生まれでインドネシア風の名前を名

乗ってはいいるが、実はH氏は華僑である。英国の皮革専門家から「インドネシアもマレーシアも皮革関係はみんな中華系がやっています。中華系以外の皮革業者に会うことはほとんどないでしょうね」といわれたことを思い出した。

H氏は中国大陸の華南地方（福建省、広東省、海南省、広西チワン族自治区などの中国南部）から移住してきた華僑集団の客家出身だが、この集団は皮なめしや靴産業と結びつきが深い。「私たちはアジアでは皮なめしや靴作りで知られているので、この業種にも抵抗がありませんでした。皮なめし工場をはじめたのは、父が友人たちと経営していた皮革製品の店を手伝うことになったからです。大きな店だったので、完成品を仕入れるより自前でつくったほうが安くすむからです」

協会から紹介されて皮なめし工場を五件まわって見たが、いずれも客家の経営者か、さもなければ彼らがマレー系と一緒に起こしている共同事業だった。タイやマレーシア、インドネシアでも皮革の店や

靴工場経営者などには客家が多いのだが、彼らは東南アジアに民族集団を中心とした強固なネットワークをもっている。後日、H氏とメールなどで情報交換をするといつも違う国から返事をくれた。香港やタイ、台湾、マレーシア、シンガポールなどから、これらの土地で同胞とのネットワークがあるらしかった。

## 1、移住者集団の結束とネットワーク

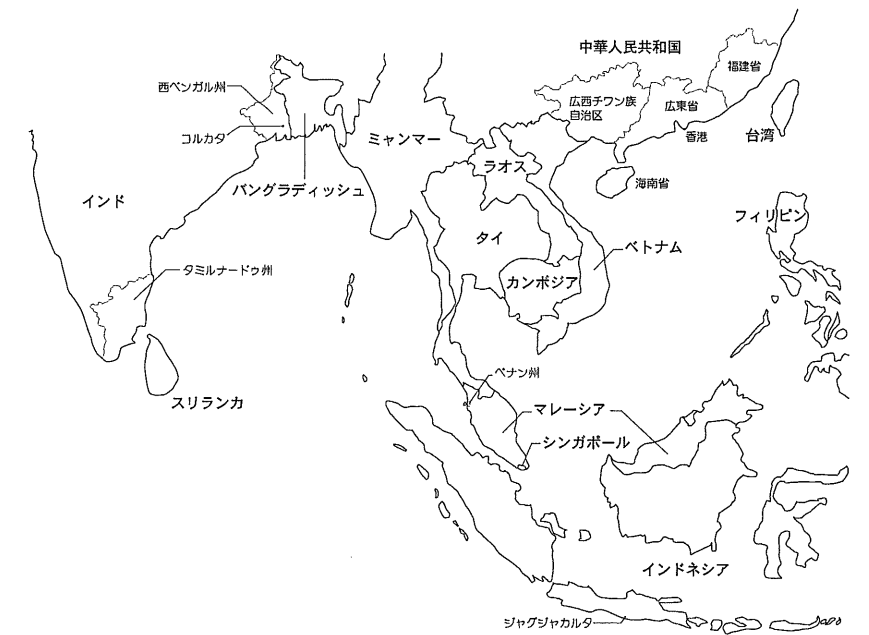
H氏に助言されて、インドネシアからマレーシアのパナン州に客家をたずねてみた。植民地時代のひなびた建物が残る州都ジョージタウンは、一七世紀以降、英国の植民地支配下において東南アジアと南アジアを欧州に結びつける貿易のハブとして発展を遂げた。ここには南インドからの移住者たちである商業カーストのチェッティヤールやムスリムたちも移住している。華僑では客家に限らず広東人や福建人が定住している。そしてこれらのアジアからの移住者集団は、いずれも、父、息子や父方おじといっ

た父系で繋がる親族による共同経営ビジネスをおこなっている。結婚によって繋がった姻族の男性たちを含めたビジネスも多く、数世代にわたって続いているところも珍しくない。彼らのネットワークは東南アジアや旧英国植民地である香港・オーストラリア・インド・スリランカなどにも及び、英国にまで広がっている。その結束の固さは父系親族を中心とした血縁関係とその延長である同じ地域出身の同族によって維持され、それが民族意識を支えている。その場合、有力な父系親族集団であれば、非営利組織を興してお寺や廟を建立する。それらは定期的に会合を開く場であり、宗教儀礼や結婚式、葬式などの人生儀礼の場でもある。こういったお寺や廟などでの活動ぶりが、一族の隆盛を示す指標にもなっている。南インド出身のチエッティヤールたちも同様に親族で神様を祀っている。その前では嘘をつくことは許されず、契約も約束も守られなければならない。二代目か三代目でビジネスが分岐し、息子たちがそれぞれ独立したビジネスをはじめめるもの、従

業員のリクルートや融資などはこれらの親族と姻族を拡大したネットワークを利用することが多い。インド系の移民では、これが結局「カースト」の結束を強めることになり、華僑であれば出身地をベースにした民族集団の「クラン」（氏族）の結束が強まることになる。これはグローバル時代でもかわらない。

地元でも有名な美しい廟（コンシー）のひとつを訪ねてみた。金や銀をふんだんに使ったみるからにまばゆく豪華な廟で、観光客がひっきりなしに訪れている。入場チケットを買おうと入口の隣にある事務所にはいった。受付の若い女性に「廟の歴史について知りたいのですが」と尋ねてみる。すると座っていた小柄なおじいさんを指さして、「彼に聞いてください」という。おじいさんは目を輝かせ身を乗り出して、「よくぞ聞いてくれた」と喜び、椅子を示して座るようにいった。

おじいさんは客家にはよくある謝という姓を名



乗ったが、そのコンシーに連なる一族出身だった。銀行を退職してからボランティアで説明係を引き受けているという。彼の先祖の客家は一六世紀に福建省からフィリピンに移住し、一七〜八世紀には台湾やインドネシアにも移住し、マレーシアにもやってきた人々だ。

謝さんはいう。「日本に住んでいる客家も多い。日本に漢字や稲作文化を伝えたのは華南からやってきた客家の子孫だから、気持ちを通じ合う」と日本と客家との関係を強調した。すべてが史実ではないかもしれないが、ともかく共産党が支配する中国には反発しており、客家と日本を結びつけることで客家のアイデンティティを強化したいと考えているようだった。

客家は漢民族の一派だが客家語という方言をもち、独自の民族的アイデンティティを形成している。一〇〇〇年にわたり、華僑として国外に移住しアジア各地をまたにかけて商業活動をしてきた人々なので、今というグローバルな集団だといえる。ちなみ

に中国の主席だった鄧小平や、台湾総統だった李登輝、シンガポールの首相だったリー・クアンユーなども客家出身である。

## 2、ディアスポラとしての客家

客家には悲劇がつきまといつている。もともと北部に住んでいた漢民族の一派だが、北方騎馬民族や他の漢民族に押されて南下し、華南の沿岸地方に住みついたという。土地もなく、生活を支える為、沿岸諸国との交易に携わり始めた。だが一四世紀から一七世紀に中国大陸を支配した明は、海外進出を禁止する海禁政策をとった。この為交易を阻まれ、海外渡航や移住も禁じられて生計をたてる術を失った。禁を犯して東南アジア諸国に定住しなければ行き場がなかった。だがそうすると帰ることはできなくなる。帰れば投獄や死刑という刑罰が待っていた。一六世紀に明に代わって政権をとった清も同じく海禁政策をとり、同じくその禁を犯せば死刑という厳罰が科された。一方当時フィリピンを征服したスぺ

インは貿易の利権を独占するため、当初は客家を強制的に清に送りかえそうとした。送還された数千人の客家たちは故国で首をはねられた。謝さんはこの話をしながら抑えきれない感情の高ぶりを感じていたらしく目を落とし声をつまらせた。故国でありながら自分たちを受け入れてくれないとすれば、定住先に活路をみいだすしかない。ご先祖の話を他人に語ることによって先人たちの受難の歴史を反芻しているようだった。その後もおこった様々な惨事の中で客家たちのなかには故国を捨て、海外に逃れることを選んだ人々も多かった。たとえ親族の一部が中国に残っていても、外地に親戚がいればいざというときには逃げ出すこともできる。親族のなかの誰かを海外に送りだすのは一族全体の安全策でもあった。「私たち客家は第二次大戦中、国民党を支持していました。戦後もしばらく台湾に逃れた国民党を支持していたので、中国共産党が政権をとった大陸にははいれなくなりました。その後中国が方針を変えたので大陸に里帰りができるようになりましたが、

私たちは大陸の中国人を警戒しています」

謝さんは親戚が台湾にいるそうだが、彼と彼の親族はペナンに暮らしているマレーシア国民である。だが、マレーシア人として暮らしてはいても必ずしも安全だとはいえないと考えている。ペナンは客家だけでなく、アジアからの移住者が多い。だが彼らは総じて目に見える対立はなく共存してきた。「これまでインド系のムスリムが暴力沙汰をおこすことはほとんどなかったし、私たちも政治的な発言はしてこなかったのです。ところが昨今南インドではなく、北インドからもムスリムがはいつてくるようになりまし。そのなかにはテロリストもいるのです。彼らに同調する狂信的なムスリムもでてきた。そうなる私たちもどのようにスケープゴートにされるかわからない」

客家や広東人、南インド出身のムスリム、ヒンドウーのチェットイヤールたちは、いずれも西欧列強がアジアを植民地にする以前から大陸と東南アジ

アをまたにかけて動き回ってきた。落ち着いた国々で他の民族と共存し、溶け込む努力をする一方、現地の女性との通婚よりも自集団内の結婚を優先し、民族的なアイデンティティを失わなかった。

今まで述べてきたようになかでも皮革に関わりが深いのは客家だが、実は南インドのムスリム集団も商人であるだけでなく、皮革製造とも深い関係がある。インドで長らく皮革づくりの職人および商人として活動してきたのは各地のムスリム集団である。

## 3、皮なめしと靴づくりの客家

同じ華南地域からの移住者でも、広東人や福建人は海外に出た時から専門職集団として認められていて、料理人や理髪師、大工や金貸し業で知られていた。彼らに比べると客家はビジネスにたけているわけでも手に職があるわけでもなかった。そこで彼らを選んだのは当時需要が急増していた皮革だったが、これが大きな成功をもたらした。

西欧では一七世紀以降、軍隊の装備の近代化が進

行し、兵隊がまとう大量の服や靴、部品などとして、皮革が不可欠な軍需品となっていた。それと前後して欧州内では幹線道路も整備されていたので、駅馬車に使われる皮革需要も大きくなっていった。人口も増え、必要とされる靴の量も飛躍的に伸びていったところでおこったのが産業革命である。近代的な工場生産は、英国の綿織物や毛織物を輸出の花形へと祭り上げていったが、蒸気機関をはじめとして、工場内での織機にも皮革は欠かせない部品であった。西欧列強がアジアで経営していた植民地でも、皮革の需要が高まっていた。そこで、なめし工場をつくり品質が安定した皮革を大量に早く供給するシステムが必要で、その需要に応えたのが現地皮革業に手をそめた客家やムスリム集団だった。

南インドではマドラス州（現タミルナードゥ州）の北部にあるムスリム居住地域になめし工場が増えていった。南インドのムスリムは中近東や東南アジアからの移住者も多く、皮革製造にたけており、あらたな技術を取り入れることにも積極的である。一方、

カーストの人々は皮革をつくることには興味を示していなかったはずだった。少なくとも皮革が大きな産業として巨大な利益を生むことを知る以前には、これに対してムスリムたちの場合、事情は違っていた。動物を屠りその肉を食べること自体にタブーがなかった。動物の屍をすべて有効に活用するのは牧畜民の伝統でもあったからだ。

また、ムスリムとならんで、皮はぎや皮なめしのなかでももっともつらく大量の労働力を必要とする部分には、いくつかの不可触カーストがかかわってきた。だが彼らはいくつかの未熟練労働者で搾取の対象であり、彼らの仕事が専門領域として評価されることはなかった。

カルカッタに移住した客家たちは、なめし工場自ら労働者たちとともに働くことも辞さなかった。なめした皮で靴や鞆などの商品をつくると、彼らはカルカッタの繁華街に進出し、小売り店をつくって売りまくった。軍をはじめとする植民地政府だけでなく、英国植民地とともに出現した都市の中間層に

インド東部にあるカルカッタ（現コルカタ）とその周辺ではさほど有力な皮なめし集団がいなかったため、客家が抵抗なく参入することができた。そのうえ周辺のムスリム業者たちはあまり皮なめしの技術が高くなく、中国や東南アジアで技術を身に付けた客家は有利であった。カルカッタに定住し、当初はムスリムから原皮を調達し、なめしをはじめた。

インドのヒンドゥーたちは、そもそも宗教的な見地から、獣の皮を剥ぎそれをなめすことは穢れにつながり、地位を卑しめることだと考えていた。そのようなタブーをもたない客家が皮革業にはいつていくことにも異論はなかったと歴史家はいう。競争者がほとんどいないことをすぐさま悟り業界に進出していった客家たちは、カルカッタ周辺に近代的な皮革業をつくりあげた。

インドの思想では屍にかかわるのは浄・不浄の論理でもっとも卑しい仕事のひとつとされている。そこで、革づくりに関してはそのような穢れのタブーがないムスリムの独壇場で、ヒンドゥーの高

むけて靴や鞆を売りこむことに成功したのである。

カルカッタのベンティンク通りという地区は靴通りと呼ばれるまでに発展し、一〇〇をこえる靴店でにぎわった。だがその繁栄も、第二次大戦後、終焉を迎える。独立インドと共産中国の関係は当初良好であったが、長くは続かなかった。一九五〇年代後半になると、チベット動乱をきっかけに関係が悪化していった。一九六二年に大規模な国境紛争がおけると、インド在住の華僑たちは迫害されていく。

中国系であるというだけで迫害された広東人や客家たちにしてみれば、共産党の支配する中国は悪夢であった。ビジネスにも岐路が訪れたが、さらに追い打ちをかけたのが環境問題である。八〇年代以降、地方行政はなめしに使われた排水が環境汚染を引き起こす点に敏感になりはじめる。排水を浄化するには巨大な設備投資が必要だが、行政の支援がなければ多くは廃業せざるをえない。そこで中華料理屋に転業する人やホワイトカラーになる人々がでてきた。インドを離れて他の国に移住してゆく人々もいた。

4、カルカッタの客家、チュー氏のなめし業

今日カルカッタでなめし工場を続ける客家は十数件に縮小していて、子弟の多くが海外で勉強している。客家たちはインド国籍をもって何世代たつていてもいまだに「客人」扱ひされていると感じている。外では現地の言語であるベンガル語も話すが、家では客家語や英語になる。ビジネス関係以外現地のヒンドゥーともムスリムともあまりつきあわない。子どもたちは英語で授業が行われる地域の私立学校で勉強し、国内の一流大学や海外の大学に進む。インド国籍があるにもかかわらずインドでは安住できないと感じており、保険の意味でも家族のうち何人かはかならず国外に出ている。

五〇代の客家で、カルカッタのタンングラ出身のダン・チュー氏は、現在はアメリカ国籍をもつ、成功した銀行家である。ウォールストリート・ジャーナル紙のインタビューに答えて半生をこう振り返っている。

インドでは中華系市民は二等市民として差別されていた。迫害されないように、極力政治的な発言を控え、目立たぬように黙々と働き続けた。「我々客家は母国の中国にいる時から日に一八時間も働いていました。それでも相変わらず貧しいままでした。他のアジアの国に移つても、やはり客家は寢食を忘れて一生懸命、男も女も働いていました」

大きな戦争は皮革ビジネスを飛躍的に伸ばし、客家たちは大きな利益を得たが、その富で彼らが投資したのは教育だった。子弟のために英語で授業をおこなう私立学校を次々と設立し、いつでも子弟が海外に飛び立てるように準備をしていた。チュー氏がチャンスをつかんだいきさつにもあるように、それが成功の鍵であることを皆自覚していた。

インドネシアの皮革業に携わる客家たちをインタビューした折も、彼らの向学心には驚かされることが多かった。工場のオーナーたちは、いずれも皮革関係の専門技術や知識を得る為に破格の投資をした。皆、インドネシア国内での専門教育だけでは

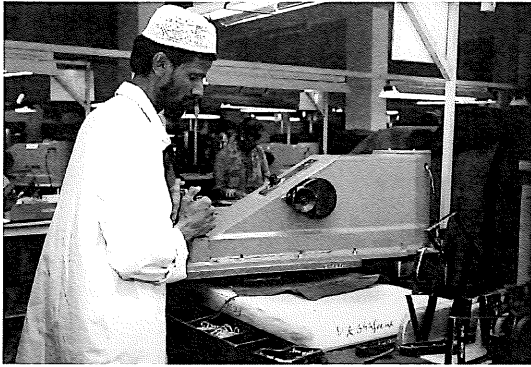
彼の父は地元の小学校の校長だったが、パートで保険外交員もやっている働き者だった。家業の皮なめし工場は母が経営していて、チュー氏も学校の授業を終えるとすぐになめし工場にいつて、重い皮をかついで仕事を手伝う日々だった。家の裏手にはゴミ捨て場もあり、お世辞にもきれいな場所に住んでいるとはいえなかったが、それを疑問に感じたことはなかった。スクーターで四〇分ほどいけばそことは別世界の繁華街に出られるけれど、親につれられてゆくことも、足を踏み入れることもなかった。

しかし教育熱心な両親の判断で、英語で授業をする私立学校に転校することになる。そこで米国人の宣教師と出会い、大きな運を手にする。彼が利発であるのに目をとめ、この宣教師は米国の学校に進むことを提案し、奨学金と寄宿先を手配してくれた。チュー氏はアメリカの大学に進学し、コンピュータと会計学を学び、大手銀行に職を得た。そしてアメリカの永住権を得、カルカッタから家族を呼び寄せて新しい生活を切り開いた。

あきたらず、欧米の有名な専門学校や大学に何年もの間留学し必ず資格をとっていた。現地ではうとまれているインドの客家たちにしても、華僑のネットワークのなかでは、独自の領域をもち経済的自立を達成した集団として十分な尊敬を得ている。そしてその地位の確立が皮革業によつていたことは皆が承知している。たとえ今はその業界にいたくとも、自集団と、その伝統的職業であった皮革業を結びつけて考えることになんら抵抗はないのである。

5、ディアスポラとしてのインド系ムスリム

インドには北のムスリムと東のムスリム、そして南のムスリムが存在する。彼らはそれぞれ異なった起源をもち、民族的にも異なつたアイデンティティをもつ。現在のアフガニスタンから侵入し、ムガール朝をつくつた人々と、現地人でイスラム教に改宗した人々の子孫が北インドのムスリムである。その一部がベンガル地方にも移り住みベンガル語を話すようになったのが東インドのムスリムだが、英国が



南インド・タミルナードゥ州の皮なめし工場働くムスリム

らインドとパキスタンが分離独立した結果、ベンガル地方の東側は東パキスタン（現在のバングラデシュ）となった。他方、東南アジアと結びつきが強く中近東や東南アジアからやってきたスパイス商人たちが現地に定住した。彼らの子孫と、現地で通婚などによりイスラム化した人々が南インドのムスリムである。

北インドのムスリムたちはヒンディー語をアラビア文字で表すウルドゥー語で読み書きをするが、東インド（ベンガル地方）のムスリムはベンガル語を話し、現在のバングラデシュの言語ともなっている。他方、南インドのムスリムは南インドの言語であるタミル語やマラヤラム語を話し、現地のタミル文字やマラヤラム文字をつかう。これら三者のムスリムの間には大きな文化的隔りがある。

南インドのムスリムは南インドの風俗に溶け込み、中東より東南アジアの文化に親和性が高い。縫製なども得意で男性は仕立て屋が多く、皮革工場でも革を裁断、縫製し、靴や鞆をつくるのが得意である。

もなかった。その地域に女性も働ける職場を多く作りだし、経済を活性化する有効な手段になった。

結果としてタミルナードゥ州は皮革の輸出で全インドのトップとなり、全インドなめし業協会の本部もタミルナードゥ州におかれていて、協会で理事になるのはほとんどが南インドのムスリムである。そ

れ自体は当然のことだと思っただけ、この協会を訪問して気づいたことがある。ムスリムのなめし工場経営者に混じって若干のヒンドゥー出身のなめし工場主がいたことである。それもカーブストのなかでは

南インドでよく知られた皮革業のまちがタミルナードゥ州の北部にあるアーンブルだ。州都チェンナイで「アーンブルに行く」というと、人々が「靴か鞆でも買うのか」と聞くぐらい有名な「皮革のまち」である。

アーンブルは英国植民地時代から皮革業で栄えた。訪問すると、州政府の肝煎りでつくられた大規模な排水浄化システムにムスリムの現地スタッフがつれていってくれた。「日本からも皮革関係の視察団がきたくらいです」とコンピュータを制御する技師たちが胸をはる。排水の浄化システムはきわめて高額の投資なので、ほとんどの中小規模のなめし工場は、設置できなければ廃業せざるをえない。だが皮革産業の振興をめざすタミルナードゥ州が建設資金を支援してこの設備が作り上げられた。結果として排水浄化システムを備えたこの町に海外からの皮革製品の大量発注が続き、大きな雇用機会をつくりだすことになった。アーンブルがある郡にはムスリムが多いが、いずれも所得が低く、女性の働き口

一番高い地位に位置づけられるバラモンカーブストである。理事のひとりがあることもなげにいう。「協会ではいつもムスリムが代表になるわけではなく、時々バラモンの事業家も代表になりますよ」。バラモンが皮なめしに携わることにはタブーではないのかと聞くと、「彼らは経営者ですからね。別に皮にさわるわけじゃないから」という答えが平然と返ってくる。今にはじまったことではなく、英国植民地時代から続いていることだという。

もらった資料を読みながらかなり違和感があったのはなめし工場のある場所である。今でも若干そのような村が残っているらしいが、穢れを嫌うとされるバラモンたちが住む「アグラハラム」と呼ばれるバラモン居住地区に皮なめし工場があることだ。それでもバラモンたちが文句をいわなかったということが私には衝撃だった。バラモンの集落の水路に排水を流しても別にとがめられなかったというのは信じられない。自分たちのコミュニティーのメンバーが経営しているなめし工場だとなにもいわない

というのでは、ヒンドウの穢れの思想はまったくの方便なのではないだろうか。

皮剥ぎや屍処理など皮革関連の職種はヒンドウの場合不可触カーストがおこなうことになっている。彼らは清掃やトイレ掃除業務もおこなう場合が多い。低賃金で、多くは伝統的に村から屍の処理や死体の処理などを要請され、それに従ってきたというのが現実である。先に述べたように、ヒンドウ教では動物の殺傷、特に牛などの大きな動物の屠畜は宗教的には穢れを呼ぶとされ、卑しめられている。村祭りなどでは女神への捧げものとして山羊を屠るが、バラモンは「低カーストが行う野蛮な風習だ」とにべもない。

しかしどうやらそれも表向きで、実はヒンドウの村人は鶏や山羊などを食用のためにひんばんに屠っている。バラモンのなかにも西洋化され、肉食に転じた人々もいる。人によっては欧米の生活が長ければ鶏肉だけでなく牛肉も食べることもある。だがそれによって彼の地位が下がるわけでもない。

の人々が嬉々として働いている。若い女性の職場としても受け入れられていて、昼には工場に家族がお弁当を運んでくる姿がみられる。住隣接でちゃんと給料がでる職場として皆が満足しているようだった。男性と女性の職場が同じだということも従来はあまり考えられないのだが、ここではムスリムの男性とヒンドウの女性が同じ縫製の仕事をしている光景もみられ、村でも受け入れられているようだった。一旦退職した高齢者も靴を点検する仕事をもらっていた。「この靴工場に三十年以上働いてきたから定年後も毎日働くことができ幸せだ」という。

### おわりに

私は南インドを研究する社会人類学者で、浄・不浄の穢れについての思想がインド社会のハイエラルキー性を根底から支えているという視点は、ロンドン大学の大学院時代に英国人の先生たちから何度も叩き込まれ、私自身もインドを分析する重要な鍵となる概念だと思っていた。だが、実を言うと今回の

ちなみに私が訪れたチェンナイ近くの屠畜現場では切り出された肉や内臓が冷蔵装置もなくむき出しで野ざらしに置かれていたが、多くの人々が新鮮で安いといつて直接買いに来ていた。そこで働いている獣医に聞くと、あらゆるカーストや宗教の人々が購入のために訪れるという。「もちろんバラモンカーストの客もくる」とバラモンである彼自身がこともなげに言った。

このようなタテマエと本音の違いに遭遇するといささか混乱してしまう。たとえバラモンであっても皮革が大きな利益を生みだす以上はなにもいわないということなのだろうか。同様に、労働環境が悪い工場ではなく、近代的な設備の工場であれば、ヒンドウの若い女性でも、靴工場で働いていることで彼女のステイタスが傷がつくわけではない。皮革業で沸き立っているアーンブルにゆくと、海外の大企業との提携により近代的なコンピュータ制御で生産管理ができる靴工場がある。靴工場は近隣の村人たちに人気の職場で、男女や宗教の別なく何千人も

調査では浄と不浄というタテマエにあまりにも気を取られすぎていたのではないかと反省した。それは、バラモンが皮なめし工場を経営しているのに驚いたということもあるが、普通は対立していると思われるムスリムとヒンドウが、しかも男性と女性が、同じ職場で抵抗なく働いているのをみたからである。

「近代的な工場だったら別に靴工場、たつてかまわない」というヒンドウの若い女性たちには職場での浄・不浄論は無用のようだったし、ムスリムの男性が働いている場所のすぐ隣でヒンドウの女性が働いているのも、周囲が非難するわけでもなかった。工場マネージャーのムスリムの男性がいう。「整備されて、労働環境が整っていて、きちんと管理された大企業、だったらみんな働きにきますよ。時間通りに働いて給料がもらえるなら、満足しないほうがおかしいでしょう」

この言葉をきいて思い出したのが、モロッコのマラケッシュで天然なめしをしている皮なめし職人のハッサンにインタビューしたときのことである。モ





モロッコ、マラケシュの天然なめし場の様子



天然なめしをするハッサン

げ、家に帰って昼飯が食べられる。化学なめしの工場だと、そうはいかない。決まった時間にいつて決まった時間に帰る。給料は安いし親戚の結婚式とかにいこうとすると簡単に休みがとれない。最新の機械とやらがたくさんあって清潔できれいかもしれないが、男がやる仕事じゃない。伝統的なやり方で天然なめしをすれば、もっと稼げる。だいたい、動物を屠るのは神聖な行為で、それを流れ作業で次々に加工させられるのでは、仕事としての誇りもあつたもんじゃない。プライドを傷つけられるじゃないか。ここでは皮なめしは金の扉だといわれてきた。それくらい儲かるからだ。俺もお金を貯めて、いつか天然なめしの工房を自分で持つのさ」

彼にとつては「稼ぎがいい」ことは、職人としての技能が正當に認められたことを意味して

ロッコでは皮なめし人の地位は高い。儲けが大きいかからだが、それは近代的な工場のことではなく、あくまで中小規模の天然なめし工場に限る。彼らはかつて近代的な工場で働くのを軽蔑する傾向があるのだ。ハッサンは、ミモザや鳩の糞や石灰などが溶かしこまれた溶液の槽に、ぬるぬるして重い原皮を浸しては引き上げる過酷な作業をやっていた。それでも彼は仲間の天然なめしの職人たち同様、近代的な工場で働くことはいやだという。自分の誇りを傷つけられるからというのだ。

私が訪問した近代的な工場はとても大きくて、なめしから皮革づくり、靴づくりにいたるまですべてそのなかでやれるくらいの規模だった。みんな喜んで働いているようにみえるのだが、ハッサンのような伝統的なめし職人が働くにはふさわしい場所ではないらしい。なぜ近代的な工場で働かないのかと尋ねると、「九時から五時までの判でおしたような働き方はいやだ」という。「自分の働き方でやりたい。今日だって、仕事は朝早くはじめて昼までで切り上

いるようだった。客家たちはヒンドウの浄・不浄の伝統を意に介さず、利益のために必要とあれば可触民カーストの従業員となめし工場で働くことをいとわなかった。一方南インドのムスリムたちは皮なめし業から皮革づくりとその販売までを一貫してこなう近代的な工場制度にシフトすることで商業的な成功を収めた。いずれの場合も既成の価値観より経済的な利益を優先させ、社会的な尊敬を獲得することに成功した。

英国やドイツの場合、皮なめし人の経済的な利益と社会的尊敬の獲得は、もつとゆつくりとギルド（同業者組合）の生成のなかで数世紀をかけておこなわれ、時には相互に品質や販売テリトリーを監視しあいながら職人の生活の保護を成し遂げていった。近代国家の出現とともにギルドの体制は崩れていくのだが、職人の地位の上昇はすでに成し遂げられていた。この点が日本やインドの場合と大きく異なるのだが、インドの皮革産業を調査しながら感じたのは欧州が数百年かけてなしたとげた専門化による社



会的地位の向上が、インドでは今ようやく、しかもかなりのスピードでおこっているのではないかということだった。

専門化による地位の上昇には教育や国家による認定制度による「権威の付与」と「専門技術の独占化」が不可欠だ。先日、インターネットでインドのカーズト別の求婚広告を調査していると、化学教育をうけてなめし人になったかつての不可触カーズト出身の技術者の求婚広告をみつけた。なめし技術者という肩書を示し、結婚相手を探すアピールに使うということは、専門教育をうければなめし人の地位も社会的に尊敬されるということだろうか。

客家や南インドのムスリムたちは、いずれも当該社会のなかでマージナル(周辺の)な地位におかれながらも、皮革業の発展のなかに身を投じたことによつて地位上昇や経済的利益という大きな恩恵を得た。皮なめし業は過酷な作業ではあつても大きな利益を生む可能性をもつ部門であつた。積極的にその分野に身を投じたマイノリティ集団にとつては皮な

めしの世界は「金の扉」でもあつたのだ。

日本における皮なめしの伝統は被差別部落で引き継がれてきたのだが、彼らのもつていた技術は近代日本の皮革産業の創生期にはなくてはならないものであつた。開国してからわずか一〇年あまりで日本が軍隊用のブーツなどをロシアに輸出できるようになるには、新しい化学なめしの技術を素早く学び、それを生かして近代的な皮革産業をつくりあげていくことが必要だつた。そこには従来からの職人の存在がかかせない。今日でも日本の皮なめしの技術は世界のトップクラスを維持している。それは彼らの伝統と技術があつたからこそだろう。

今回は英国の皮革の一大生産地であつたノースハンプトンシャー地方の皮革産業の発展の歴史を概観しながら、日本の皮革づくりの伝統と近代化とのかわりについても考察してみたい。彼らにとつて「金の扉」としての皮なめしの世界とはどのようなものだったのだろうか。

(にしむらゆうこ・駒澤大学教授)